神夜のザーメン中毒日和

夕暮れの宿場町。旅籠の看板がカタカタと風に揺れる頃合いである。

楠舞神夜は街道沿いの茶屋で一服しながら、往来をゆく男たちを眺めていた。膝の上には冷めた湯呑み。だが彼女が渇きを覚えているのは、喉ではない。

「……ああ、今日も良い男衆が歩いてますねぇ……」

つい先刻、宿の便所で自分の中に溜まった精を掻き出したばかりだというのに、もう子宮の奥がキュンキュンと疼いている。正確には、子宮より上の場所――**おチンポ様の御神酒を受け止める、この舌と喉**が。

ここ二、三日、神夜は奇妙な飢餓感に取り憑かれていた。きっかけは三日前、野盗に捕まって苗床にされた際、五人の男に代わる代わる口内射精されたことだった。最初はむせ返るような苦しさだけだったのに、三度、四度と喉越しにゴクリと飲み干すうち、**ザーメンの味が、急に美味しく感じられてきた**のである。

「もう、あれからずっと……おチンポ様の御神酒が飲みたくて、飲みたくて……」

母乳や愛液ではなく、男の精そのものを「美味」と感じる舌が、今の神夜には備わってしまっていた。より正確に言うなら、**ザーメンでなければ渇きが癒せない**という、困った中毒症状である。

茶屋の代金を銅貨で払い、神夜は立ち上がる。衣装の胸元からは128cmの爆乳がたわわに覗き、ぷっくりと広い乳輪が常にはみ出ている。下着は一切つけていないから、歩くたびに乳房がブルンブルンと波打ち、すれ違う男たちの視線を無意識に奪っていく。無毛の秘所も腰布の下で既にしっとりと濡れそぼっていたが、今の彼女にとってそれは副次的な渇きにすぎない。

「あ……」

前方から歩いてくる若い男が一人。年の頃は二十そこそこ、旅の商人か何かだろうか。日に焼けた素朴な顔立ちと、荷物を抱えた逞しい腕。神夜の瞳が、スッと細められる。

（あの若者は……良い。清潔そうで、若くて、元気が溢れてそう。きっと美味しいザーメンをお持ちだわ……♥）

まるで甘い菓子でも見つけた子供のように、神夜の顔がほころぶ。

すれ違いざま、彼女はわざと「あら……」と小さく声を上げてよろめいた。

「すみません、旅の者でして。少々お尋ねしたいことがあるのですが……♥」

若者は神夜の姿に目を丸くする。そりゃそうだ。片田舎の宿場町で、128cmの爆乳をユサユサ揺らし、乳輪まで丸

出しにした絶世の美女に声をかけられたのだから。

「あの、少し静かな場所でお話を……ご迷惑でなければ、参りませんか？」

上目遣いに微笑みかけ、くいっと路地のほうへ顎をしゃくる。若者は一瞬ためらう素振りを見せたが、神夜の潤んだ瞳と、服からはみ出た乳輪の存在感に抗えるはずもない。

二人はひっそりとした裏路地へと入っていった。

夕陽の届かない細い路地。湿った石畳と、どこかから漂う線香の匂い。

神夜は若者と向かい合うと、まずはゆっくりと膝をついた。石畳の冷たさが膝小僧に心地よい。

「あ、あの……？」

「ふふ……♥」

神夜は見上げるように若者を見つめながら、両手をスッと伸ばし、男の股間に触れた。

「やっぱり……良いおチンポ様をお持ちですね。この膨らみ、もうパンパンでいらっしゃる……♥」

衣類の上からでもわかる。若者はすでにガチガチに勃起していた。当たり前だ、こんな爆乳の美女に路地へ連れ込まれたのだから。

神夜は丁寧に、まるで宝物を紐解くように、若者の帯をくつろげていく。下穿きをずらし、そしてーー

「はぁあああああ……っ♥」

ビクリと震える若者の陰茎が、夕暮れの薄明かりの下にあらわになる。まだ若々しい張りのある竿。しかし血管はクッキリと浮き上がり、亀頭はテラテラと先走りを滲ませて紅色に輝いている。

「まあ……なんて立派なおチンポ様……♥ ご立派で、美味しそうで……感激極まりないです……♥」

神夜は両手でそっと包み込んだ。掌いっぱいに感じる熱と鼓動。彼女はうっとりと頬ずりを始める。ツルリとした亀頭をホッペタに擦りつけ、竿の側面を唇でなぞり、陰嚢の皺まで丁寧に鼻先で愛でていく。

「ああ……おチンポ様の匂い……たまらないです……♥ 若い雄の香り……これだけで、もう……」

神夜の口元からツウッと唾液が垂れる。彼女は自分の口内が一気に潤んでいくのを感じていた。唾液腺が疼き、舌がザーメンを求めて疼いている。

「それでは……いただきます♥」

まずは亀頭にチュッと口づけを落とす。尿道口に溜まった透明な先走りを、唇で優しく吸い取る。塩辛くて、少し苦くて、それでいて若い雄の力強さが凝縮された味。

「ん……っ、美味しい……♥ このちょっぴり苦い感じ……先走りだけでこんなに美味しいなんて、極まりないです……♥」

次にパクリと亀頭を咥え込む。舌を筒状に丸めて、亀頭の縁をぐるりとなぞりながら。

「ちゅぱ……っ、れろぉ……♥ んふ……っ、おチンポ様のカリが……舌に引っかかって……♥」

神夜の口淫は決して急がない。彼女は「ザーメンを搾り取る」ということを、一種の儀式として丁寧に行うのだ。舌で愛で、唇で扱き、喉で締め、そしてようやく御神酒を賜る——その一連の所作こそが、彼女の飢えを最も深く癒す。

「んぅ……っ、じゅるるるるっ……♥」

竿を口腔いっぱいに咥え込みながら、神夜は爆乳をユサユサと揺らす。自分の乳輪が服からはみ出し、若者の目にどう映っているかを意識しながら。

（見てください……♥ こんなに大きな乳輪、はみ出させて、路地で膝をついて、あなたのおチンポ様にしゃぶりついてる淫乱な姫を……♥）

ふと顔を離し、竿に絡みついた唾液を長く糸引かせる。神夜は亀頭にチュッと口づけしながら、とろけた目で若者を見上げた。

「おチンポ様……とっても美味しいです……♥ でも、そろそろ……御神酒をいただけませんか？ わたし、もうお腹ペコペコで……」

そう言うと、今度は根元まで一気に咥え込んだ。

「んぶぅぅぅっっ♥♥♥」

喉の奥に亀頭がゴリュッと当たる。通常の女なら嘔吐きかねない深さだが、神夜は喉の締めつけを自分で制御できる。喉奥で亀頭を締め、舌で竿を扱き、唇で根元を締める——三位一体の快楽が若者を包み込む。

「んぐっ、んぐっ、じゅぼぼぼぼぼっっ♥♥♥ んふぅぅぅっっ♥♥♥」

頬を思い切り凹ませ、口腔内全体を陰圧にして吸い上げる。128cmの爆乳がブラブラと揺れ、乳輪が服の縁から完全にこぼれ落ちるのも気にしない。

（あ……♥ おチンポ様が膨らんで……♥ 来ます、来ますね……♥ たくさん、たくさん搾らせてくださいませ……♥）

神夜は一層激しく頭を前後させる。長い黒髪のポニーテールが乱れ、唾液が顎を伝い、石畳に落ちて光る。

「ん"っっっ、ん"っ、ん"ぅぅぅーーっっ♥♥♥」

そしてーー

ドクンッ、ドクドクドクドクッッッ！！！

若者の精が、神夜の喉奥に直接迸る。熱い。若いからだろうか、精の温度が他の男よりずっと熱く感じられる。第一射、第二射、そして脈打つたびに喉の奥へと注がれる濃厚なザーメン。

「んぐっ……っ、ゴクリ……んぐっ……っっ……ゴクゴク……♥♥♥」

一滴も逃すまいと喉を鳴らして嚥下する。まずは喉越しの熱さ、次に舌に広がる濃厚な旨み、そして鼻に抜ける若い雄の芳香。一射ごとに神夜の脳内がチカチカと輝き、子宮がキュウウウッと切なく疼く。

（ああ……美味しい……美味しい……っっっ♥♥♥ これです、この御神酒が……欲しかったんですぅ……っっ♥♥♥）

彼女は尿道に溜まった最後の一滴まで、優しく吸い上げるようにチュウウウッと亀頭を吸った。口を離すと、まだ半勃ちの陰茎がテラテラと神夜の唾液で濡れ光っている。

「はぁ……っ、はぁ……っ♥」

肩で息をしながらも、神夜は満面の笑みで若者を見上げた。

「……ごちそうさまでした♥ とっても濃厚で、若々しくて、最高の御神酒でしたよ。感激極まりないです……♥」

彼女は立ち上がる際、わざと衣装の乱れを直さない。左の乳房などは乳輪どころか乳首まで露出していたが、それにも気づかぬふりで微笑む。

「私は楠舞神夜と申します。もしまた……御神酒をいただける機会がございましたら、いつでもお呼びくださいませ♥」

神夜はぺこりとお辞儀をし、乱れた衣装をあえて直さないまま、くるりと背を向けて路地を出ていく。

露わになった左の乳首が、夕暮れの空気に触れてツンと硬く尖っているのを感じながら。

「……はぁ、美味しかったぁ……♥」

ぽつりと呟き、口の周りに残ったザーメンを指でぬぐい、それをまたペロリと舐めとる。

「でも……まだ、もっと飲みたいかも……」

彼女は茶屋のほうへと歩き出す。そこにはまだ、たくさんの男たちがいる。旅の商人、野盗崩れの荒くれ、年嵩の旦那衆ーーそして彼らは皆、美味しい御神酒を蓄えたおチンポ様の持ち主なのだ。

今夜もまた、神夜のザーメン中毒日和は終わらない。というより、夜はこれからである。

宿に戻る前に、あと三人くらいは裏路地に連れ込めるだろうかーーなどと考えながら、128cmの爆乳をユサユサ揺らし、無毛の秘所をしっとり濡らして、彼女は往来へと消えていった。

「ふふ……♥ 次のおチンポ様は、どんな御味かしら……楽しみ極まりないです……♥」

（了）